The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	志賀直哉『和解』における＜自己＞ : 父子関係を中心に
Author(s)	モハッマド, モインウッディン
Citation	阪大近代文学研究. 2010, 8, p. 13-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

志賀直哉『和解』における〈自己〉
――父子関係を中心に――

モハツマド モインウッディン

はじめに

志賀直哉『和解』[1]は大正六年九月に書かれ、同年十月『黒潮』に掲載された（初出は次女の出生を描く第十章を欠く。翌年、単行本『夜の光』に収録される際に、書き足された）[2]。作中の「一昨年の春」（執筆時点を現在とすれば大正四年になる）に「自分」の家を訪ねて来た父と会うのを避けたため、以前から続いていた不和[3]がいっそう深まる状況や、長女の死がもたらす空虚な寂しさ、次女の出生で明るくなる家の様子が事細かに描かれている。長女の死や、長女の埋葬する場所をめぐり、「自分」は父方の親戚皆に対する「不愉快」を感じ、父や父方の親戚と疎遠になる。しかし、長女の死後頻繁になった友人との交際や「郵便局員の書いた」作品からとった「二枚半の文章」（九）『或る親子』の影響、そして次女の誕生によって、肉親等に対して調和的になった「自分」が祖母や義母の働きかけによりついに父に詫びる様子が描かれている。このように他者[4]からの影響によって、「自分」の考え方は大きく変化している。

父子の深刻な不和が和解（京都での事件、長女の死、次女の出生など様々な場面が描かれているが、それらは父子の不和・和解に間接ないし直接に関わる場面なのでここでは詳細を省略し、後述したい。）に至るまでの出来事が『和解』の中心となっているが、その不和と和解の間の重要な過程として、主人公が調和的になる段階が描かれている。不和の場面は作品が発表された当時多く論評されたのに対して、「自分」が調和的になっていく場面はそれほど取り上げられなかった。先行する研究においても不和の場面が最も盛んに論じられている。ただし、広藤玲子氏は、『和解』には「父との不和の原因が書かれていない」[5]ことを指摘し、また関谷一郎氏は、父子の「不和の根源がエディプス・コンプレックス」[6]にあると述べている。

作中において「自分の頭を一番占めてゐる父との和解を書

く」（十六）ことが『和解』執筆の背景になっている。ここでは、父子の和解に至るまでの状況を理解するために、不和から和解の間に描かれている諸要素、すなわち主人公の結婚の問題、長女の死と次女の出産、「自分」の創作活動『夢想家』や長篇のコムポジション、『或る親子』などについても見る必要がある。今までの研究では、結婚の問題、長女の死と次女の出産は多少触れられている。しかし、それらは父子関係を捉えるにはまだ不十分であると感じられる。それに比して、「自分」の創作活動（長篇や『夢想家』と題する作品）と不和との関わりや、「自分」が調和的になる際の友人の役割や、『或る親子』との関わりについて、議論の対象となっている例は私の知る限り見当たらない。

本稿では、作中に見られる父子関係（不和から和解）について考察を行うことによって、『和解』における〈自己〉の問題を明らかにしたい。

一　父子の不和の根源
——諸要素との関わり——

「自分」の結婚であれ長女の死であれ、それらの場面には父子の確執が明確に表れている。この争いは二人の間に深い不和を生む。そして、「自分」が父との不和を作品化しようとするが失敗に終わるという場面が繰り返される。このことは父子の不仲の問題とどう関わっているだろうか。

ここでは、まず「自分」の創作活動について考え、次に他の諸要素を検討することによって不和の根源を探りたい。

一・一　自分の創作活動
——不和との関わり——

『和解』には、職業作家である「自分」が父との不和を作品化しようと試みる場面が多く見られる。とりわけ、『夢想家』と題した小説の構想は頻繁に登場する。池内輝雄氏[7]は『夢想家』について、「小説「和解」は、習作「夢想家」から小説「和解」へと変転せざるをえなかった作家の内的記録、創作ノートといった内容を持っている」と指摘している。氏はさらに『夢想家』が書き上げられなかったことに関連して「実生活のうえでその不和の実質的内容が死滅していた」と述べている[8]。が、作中では『夢想家』を書き上げられない理由として、「不和の出来事は余りに多かつた。それから前にも書いた如く、それを書く事で父に対する私怨を晴らすやうな事は仕たくないといふ考が筆の進みを中々に邪魔をした。」（三）という説明がある。このように、先行研究の指摘と作中の事実には隔たりがあるといえそうであり、作品世界と作者の実生活を区別して『夢想家』について考える必要がある。

『和解』の作品中では、長女の埋葬直後の段階（作中での事件を生起順に並べると、これは大正五年八月上旬になる）で「自分は此五六年間父との不和を材料とした長篇を何遍計画したか知れない。然し毎時それは失敗に終わつた」（七）とある。それはどのような長篇だったのであろうか。けっして『夢想家』のことではないだろう。時間を追って考えると「三年程前」の「長篇」の「コムポジション」は『夢想家』より以前のことになるからである。その長篇の「コムポジション」は書き続けられなかったため、『夢想家』（或いは『空想家』）の構想が浮かんで来たという。この問題について以下に考えたい。

「五六年間父との不和を材料と」する「作物の発表が生む実際の悲劇を考へる」ことが、それら作品の挫折のより大きい原因とされている。父との不和を作品として発表することで、実際に悲劇になるのか。もしそうであれば、「三年程前」、「その悲劇をできるだけ避けたい要求から長篇」（七）の「コムポジション」をしたとき、なぜこの「コムポジション」にも不和を描こうとしたのだろうか。

或る陰気な顔をした青年が自分の所へ訪ねて来る。それは松江の新聞に其頃続き物を書いてゐる青年だつた。其青年が届けてくれる続物を読む。それは父との不和を書いたものだつた。（中略）其青年が腹立ちから父に不愉快な交渉をつけて行く。父は絶対に此青年を自家の門から入れまいとする。其他色々さう云ふ場合父と自分との間に実際起こり得る不愉快な事を書いて、自分はそれを露骨に書く事によつて、実際にそれの起こる事を防ぎたいと思つた。見すく書かれたやうには吾々も進まず済ませる事が出来ようと思つたのだ。（七）

このように「実際の悲劇」を「避け」ようという意図が明らかにあったにもかかわらず、この作品も書き上げる事は出来なかった。

其青年と父との間に起こる争闘、多分腕力沙汰以上の乱暴な争闘、自分はコムポジションの上で其場を想像しながら、父が其青年を殺すか、其青年が父を殺すか、何方かを書かうと思つた。所が不意に自分には其争闘の絶対へ来て、急に二人が抱きあつて烈しく泣き出す場面が浮かんで来た。（中略）自分は其長篇のカタストローフをさう書かうとは決めなかつた。それは決められない事だと思つた。実際其所まで書いて行かねばそれは如何なるかわからぬと思つた。しかし書いて行つた結果、さうなつて呉れれば如何に愉快な事かと自分は思つた。／此長篇は少し書いたが、続かずに了つた。（七）

傍線部の如く、お互いに殺し合うほどの悲劇、つまり不和の頂点が想像されている。ところが、「其争闘の絶対」に至って「二人が抱きあつて烈しく泣き出す」という正反対の結果が「不意に」脳裏に浮かび上がった。しかし、そのように

書くことは「決められない事だと思」い、この長篇は中止するに至った。そして、その三年半後(9)に、「自分は六年前、自分が尾の道で独住ひをしてゐた前後の父と自分との事を」『夢想家』と題して「書かうとした。自分は父に対して随分不愉快を持つてゐた」(一)というように、この段階でも父との不和を作品化しようとしている。ところが、「自分」は「一度書いて失敗した。又書いたがそれも気に入らなかった」(二)。とうとう完成できないため「材料を変へる」(二)ことにした。この後も父との和解が実現するまでに何回も「自分」はその不和を作品化しようとする。

・「夢想家」を書き直す事にした。(三)

・今かかつてゐる「夢想家」の調子まで狂はしかねないと思つた。(十一)

・自分は又十月の雑誌に出すべき「夢想家」に取りかかつた。(十二)

しかし、いつも書き終わることができない。なぜ「自分」はこれほど何回も失敗しつつも不和について描きたいのか、またそれを描くことでどのような結果を期待しているのであろうか。

「五六年間」計画して来た長篇や「三年程前」コムポジションした長篇の挫折を考え合わせれば、前者の失敗の主因は「作物の発表が生む実際の悲劇」の可能性という「自分」の抱く恐れであるが、後者のそれは、その長篇の結末が「自分」が思った通りに進められなかったことである。もし不和を材料とする作品を発表できていれば、どうなっていただろうか。コムポジションした長篇における青年とその父親の関係のように親子関係はさらに悪化してしまったかも知れない。「自分」に父子関係が悪化するという考えが多少なりともあったとすれば、「自分」がこれを実際に起こりうる悲劇として想像している可能性がある。そのように不和を描いた作品の発表で起こる悲劇、或いは親子関係の悪化という恐れがあるにもかかわらず、不和を作品化する欲望は「自分」を繰り返し襲う。また、第十章以降の段階つまり「自分」が調和的になりつつある時期においても、不和を材料とする『夢想家』(先述の第十一章や第十二章の引用を参照)が構想されている。この時期においてもまた不和を作品化するのは、いうまでもなく不和を悪化させるためではないだろう。寧ろ作家としての「自分」が、作品化によって父に本来あるべき親子関係についてのメッセージを伝えようとしているに違いない。つまり、「自分」が面と向かって父に言えない考えを作中人物の姿を借りて表明したかったと考えられるだろう。とすれば、第九章の調和に関わる段階においても不和を作品化する欲望を抱いていたことは、父との不和を解決したいという考えによるといえそうである。和解の実現後に不和を描こうとしなくなるのは、それもおそらく、かつては不和の作品化で自己主張しつつも不和の解決を期待していたが、和解の後はその

必要がなくなったからであると考えられる。

ここで一つの疑問が生じるかも知れない。もし「自分」が父との不和を解決したいのなら、なぜ直接父にそう言わないのか。それは自己主張の強さのせいであろう。なぜなら、直接父に会って話せば、ものごとの成り行きによっては頭を下げる羽目になるかも知れないからである。このように不和を作品化したいという「自分」の欲望は、自己主張の強さゆえであると考えることができよう。

一・二　作品における父子の不和の問題
――一族との関わり――

(1)　不和の根本原因

「十一年前」に起こったそもそもの不和から、あらためて父子の不和の問題について考えたい。

（前略）丁度十一年前父が「これからは如何な事があつても決して彼奴の為めには涙は溢れない」と人に云つたと云ふ。そして、父がさう云ひ出した前に自分が父に対して現はした或る態度を憶ふと自分は毎時ぞッとした。父として子からこんな態度をとられた人間がこれまで何人あらう。自分が父として子にそんな態度を取られた場合を想像しても堪えられない気がした。父がさう云つたと聞いた時に父の云ふ事は無理でないと思つた。そして自分も孤独を感じた。(三)（傍点部、論者による）

傍点部の「態度」がどのようなものであったかは明確でないものの、それは父に不愉快を与えるほどの「態度」だったことがうかがえる。この十一年前の「自分」の「態度」に対する父の反応は「無理でない」ことだと思っている。それに比して、「自分」の「一昨年の春」以後の態度はどうだろうか。父は、「二人の間の不和の後に或る和らぎを作る目的で」(三)結婚したばかりの「自分」が住んでいた京都の家へ「自分の一番上の妹を連れて」遊びにやってくる。父は二人の結婚を認め、親子の関係を修復することを企図している。ところが、「自分」は父に手紙を書いて会うのを拒絶し、父を激怒させる。次に引用するのは、この事件と関わる半年後の場面である。

父は、／「貴様が此家へ出入りする事は少しも差支えない。それは俺は喜んで許す。然しきまりをつけねばならん事は明瞭つけたいが、どうだ」と云つた。／「京都の事はお気の毒な事をしたとは思つて居ます。あの頃とはお父さんに対する感情も余程変わつて居ます。然しあの時私がああした事は今でも少しも悪いとは思つて居ません」かう答へた。／「さうか。それなら貴様は此家へ出入りする事はよして貰はう。」(三)

「貴様が此家へ出入りする事は少しも差支えない」という父の発言からは、穏やかに「自分」と話し合おうとする態度

が読み取れる。が、「自分」の「今でも少しも悪いとは思つて居」ないという発言は再び父の怒りを買う。十一年前の出来事について感じる後悔と比べると、現在の父に対する「自分」の態度には、寧ろ素直さよりも頑固さの方が強く出ており、不和はさらに深まっている。「京都の事」についても、「お気の毒な事をしたと」思うのにもかかわらず、「自分」が「少しも悪いとは思」わないとさえ言う。そして「「直ぐ帰ります。」自分は祖母と母にさういつて、妻に「お前も来るなら来い」」(三)と言い、頑固に家族の反対を押し切り外に出てしまう。十一年前と比べて現在の「自分」は父の気持ちをあまり汲もうとせず、「自分」の感情に頑なになっている。その結果、母の頼みに耳を貸しもせずに、深夜に家を出てしまう。また、夜も更け、「人通りもな」い道路で、「自分」は妻に向かって次のように言う。

「若しお前が俺のする事に少しでも非難するやうな気持を持てば、お前も他人だぞ」自分は突然こんな事を云つた。妻は黙つて居た。／「若し俺がお父さんの云ふ事をはいく諾く人間だつたらお前とは結婚してやしなかつたぞ」自分は嚇かすやうに又こんな事を云つた。(三)

以上の引用からも、考えを妻にも押し付ける「自分」の態度が読み取れる。また、京都の事件前後に見られる「自分」の過去への言及[10]から、結婚が父子の不和の原因の一つとなっていることがうかがえる。けれども、繰り返しになるが、父が一番上の妹と一緒に「自分」の家を訪問したことから、父は「自分」の結婚を認め、親子関係を修復する方に一歩進もうとしたと思われる[11]。かつて父子の不和の一因となった結婚を父は追認しようとしている。あるいは「自分」は、そのことに薄々気付いていたかもしれない。もし、父が「自分」の家を訪ねた時、「自分」が父に会うのを拒絶しなければ、「本当の和解がその時に来」(三)ていた可能性がある。しかし「自分」の一方的な拒絶により不和は一層深まり、やがて来る長女の死によって父子間の不和は、さらに深刻になる。このことから、不和の根本にはやはり「自分」自身の頑固さや自己中心的な態度が深く関わっていることが指摘できる。

(2) 長女の死から埋葬
――不和との関わり――

長女の死から埋葬に至る場面にも、こうした「自分」の頑固さや自己中心的な態度が見て取れる。また、ここでは、「自分」だけではなく父にも同様な態度が見られる。長女の死に至る過程は、父の希望に応えて祖母が我孫子から「赤児を連れて帰」ったところから始まる。麻布の父の家から帰った後赤児は体調を崩し、次第に具合が悪くなり、やがて重体に陥る。

必死の治療の甲斐もなく赤児は死んでしまう。長女の死を前に、「自分」は、「若し皆に父と自分との関係に赤児を利用する気がなかつたら、赤児が死なずに済んだのだ」（七）と考える。これは、父方の親戚達を含めた麻布の家と日頃の付き合いを絶つ意志を示すものであろう。「八月廿日朝我孫子を出て妻は初めて赤児の墓参りをした。それから自分は友達の家へ行つた。妻だけ麻布の家へ行つた」（八）ことからもそういう状況がうかがえる。「八月廿日」とは赤児の死後一ヶ月も経っていない時期である。長女の死や埋葬で深刻なものになった父に対する怨みの気持ちはまだ鮮明であったに違いない。そのため「自分」は麻布の父の家へ行かなかったといえる。妻がそこに行ったのは「自分」が妻を行かせたのか、それとも妻が自ら行ったのかは判断できない。ところで、父が妻に「なぜ赤児の死骸を東京へ連れて来たと怒」（八）ったことは「自分」の父に対する怒りをさらに深刻なものにする。父の言葉にはやはり頑なさがあらわれている。このように父子の葛藤には両者の自己中心的な考えがあると指摘できる。こうした不和のありようは赤児の埋葬[12]について話し合う次の場面にも端的に描かれている。

「飛んだ事でございました」とTさんが云つた。そして「先程電報を拝見しまして早速電話で箱根の御別荘の方へお指図を願ひました所、慧子さんは我孫子のお寺へ葬るやう御命令で御座いました」と云つた。／聴いている内に自分はムカ〳〵して来た。／「私共もどれだけ此所に住んで居るか分かりませんからね。葬るのは矢張り東京へ葬つてやるつもりです」と云つた。（七）

「自分」は長女を東京（青山にある家族の墓地のこと）に葬ろうとしている。その思いは以下の引用からも読み取れる。

青山の墓所に埋まつてゐる、今の自分より年若く死んだ実母の側に其初孫を埋めてやる事は実母の為めにも赤児の為めにもさうありたい気が自分にはしてゐた。（七）

しかし、父の頑固さはそのことを許さない。

其朝赤坂の叔父から、棺は赤坂へ運ぶやうと云ふ電報が来た。父が麻布の家へ運ぶ事を拒んだのだと思つた。自分は腹から不愉快を感じた。（中略）今はせめて死んだ者に対して出来るだけの事をしてやりたかつた。所が父は麻布の家へ連れて行く事を拒んだ上に赤児の小さい叔母共や曾祖母に、「皆も赤坂へ行く事はない」と云つたと云ふ事を聴いて、自分は腹の底から腹を立てた。（七）

父が「麻布の家」ではなく「棺は赤坂へ運ぶやう」といったことと、Tさんから間接的に聞いた「慧子さんは我孫子のお寺へ葬るやう御命令で御座いました」という父の言葉からうかがえるように、父は赤児を家族の墓に埋葬するのを拒否している。京都での事件やその六ヶ月後の衝突における怒りが父の中で蘇ってきたのだろう。「自分」に対する父のその怒りは「其儘に赤児に移して現は」れているようである。こ

のように、十一年前に始まった不和は長女の死と埋葬の場面においてその頂点に達したといえよう。

本章では、父との確執が深まるそれぞれの場面を見てきたが、いずれにおいても「自分」と父の頑固さや、それぞれの考えを押し付ける態度が不和を深める要因となっており、両者は各々のこのような態度のせいで相手に積極的に対応せず、不和は深まるばかりになったといえよう。

二　調和への道
――他者との関わり――

では、「自分」が「調和的な気分」に至るまでの変化はどのようにもたらされたのだろうか。「自分」が自らこの変化をもたらしたわけではない。作中に見られるように「自分」に起こる変化は周囲の者と深く関わっており、どのように彼らの影響を受けているのかを探る必要がある。こういった周囲の者として、友人や家族らが登場してくる。それぞれの描写について考えると、家族は第一章から皆頻繁に現れるが、長女の死の前後の場面（第五章から第八章前半）には妻以外に家族の描写はあまり見られない。これと対照的に友人の描写は第一章から第四章までは稀にしかないが、第五章から、特に長女の死後にかけては多く見られる。友人としてはM、画家のSKなどが登場し、中でもM[13]はもっとも親密な友人として描かれている。

また作中、調和前後、つまり長女の死から次女の出生の間の段階で現れる他者の創作を基にした『或る親子』は父子関係に働きかける重要な要素として描かれている。この作品が発表された時期、そして作品内容がどのような意味を持っているかについても考察する必要がある。本章では主に「自分」が調和的になる場面と、それに関わる周囲の者（家族[14]や友人）および作中に出て来る作品を取り上げたい。

二・一　周囲の人々
――家族や友人との関わり――

祖母の「顎が外れ」たことで「自分」が心配のあまり祖母を見舞いに行った時、父は母を通して「自分」の訪問を不愉快に感じていることを表明する。作中では、父が「自分」の訪問について母にどのようなことを言ったかは明確にされないが、ただ母は父に呼ばれて行って戻った後、「自分」に、「かう云ふ御病気の中で若しお父さんと衝突でもするやうな事があると、それこそ、何よりの不孝になる」（十一）という理由で「自分」を帰そうとする。母の「衝突でもするやうな事」という言葉からうかがえるように、父は「自分」の訪問につ

いて母に何か厳しいことを言ったのかもしれない。そのため母は、「自分」に「お祖母さんもネ、この御様子ならもう心配はありませんから、今日はどうかこれで帰つて下さい。ねえ、どうか気を悪くしないで」と懇願しながら「自分」にその事情を理解させようとする。「自分」は母のその願いに対して穏やかな反応を見せながら、「お父さんと僕との関係と、僕とお祖母さんとの関係とは全然別なものに僕は考へてゐるんです。（中略）兎も角出来るだけ穏やかにお父さんに手紙を書いて願つて見ませう」（十一）と発言する。なぜ直接に会いたくないのか。京都の事件の六ヶ月後父に直接会った結果不和は寧ろ深くなったため、今回も同じことが起こるかも知れないのではないかという思いがあって会うのを避けたのかもしれない。または面と向かっては穏やかに話ができないという恐れがあったのかも知れない。が、穏やかに手紙を書こうとするのは父にいい印象を与えたかったためではないだろうか。ところが、「手紙を書いてゐる内、頭に置いてゐる父」に対する「自分の感情」は「絶えず」安定していなかった。「穏やかな顔をした父を頭に浮かべながら、自分も穏やかな気持で」手紙を書こうとすると「父の顔は急に意固地な不愉快な表情をする」。そして、とうとう手紙は書き上げられず、その後父に「直接お話する事にし」た。長女の出産や死去前後の「自分」と比較してみれば、この時期の「自分」は心理的に穏やかになっている様子が読み取れる。父に会う直前に母に懇願され、それに動かされて詫びるに至る。このように父子の和解の始まりは「自分」が父へ手紙を書くことを決心する場面にあると指摘できる。また、父に会う直接的な契機となったのは祖母のためである。

ところで、「自分」がこの時期にここまで穏やかな態度を見せるようになったのは、やはり「自分」が調和的になっているからである。作中で初めて「調和」という言葉が現れるのは第九章である。妻が次女を懐妊した直後の時期にあたる。そのため、「自分」は妻が次女、つまり「自分」と最も血の繋がりの濃い者を懐妊したことにより調和的になったと考えられやすい。しかし、もしそうなら、なぜ長女を懐妊した後「自分」の態度は調和的にならなかったのかという疑問が出てくる。この時、父は京都の事件を考えずに、初孫の出産費用を全部払ったが、「自分」は祖母に何回言われてもその礼さえも言わなかったのである。長女の時は「自分」の父に対する頑固な態度は変わらない（第四章）。であるから、次女の懐妊だけが「自分」の感情を変化させたとは考えにくいのではないだろうか。「自分」が調和的になる契機は他にありそうである。

まず、友人達との関わりとこの間に出て来た新しい作品との関係について考える必要がある。本節では友人との関わりについて論じ、創作については次の節で論じることにする。従来の研究では、友人たちと「自分」の調和との関わりはあ

まり議論の対象となっていない。だが、作品を見ていくと、友人達の登場は「自分」の家族より少ないとはいえない。友人に関わる描写を章ごとに取り上げると以下の通りである。

第五章　Y、K子
第六章　Y、K子
第七章　画家のSK（以下SKとする）、Y
第八章　Y、M、SK
第九章　M、ある親しい友
第十章　K君、Y
第十一章　M、Y
第十二章　Y
第十三章　SK
第十四章　SK
第十六章　SK、H

第一章から四章には友人はほとんど登場しない。四章までに出て来る友人には名前がなく、ただ、友達と呼ばれている（第二章ではSという人物が登場しているが、友人か否か明確ではない）。友人が最も多く登場しているのは九章から十一章である。これは「自分」の調和的な考えが始まる時期であり、親族よりも友人が多く現れるのは「自分」が調和的になるのに友人が大きな役割を果たしていることを示唆する。ここでは、主に「自分」が長女の死後父方の親戚皆に対する「不愉快」を感じた後、調和的になる時期を取り上げる。

・十日ほどしてYが朝鮮支那の旅へ出てから、我孫子は尚淋しくなつた。丁度其頃最も旧いそして最も親しい友のMが細君と一緒に泊まりがけで遊びに来た。（八）

・Mが暮れ近くから隣村に住むやうになつてからは我孫子も賑やかになつた。五六年前から多く他の地方で住んでゐた自分は久し振りでMと繁々往来するやうになつた。そして日が過ぎ、月が過ぎるに従つて自分の中にあつたMに対する旧い愛が、又何か新しいものを附加しながら眼覚めて行くのを感じた。此事は愉快だつた。そして自分の心にいい影響を与へた。（九）

長女の死によって、「自分」は「祖母にも母にも」不愉快を感じ、夫婦の生活は「急に淋しくな」る。そのとき自分の親しい人間関係は友人達の他にはなかった。Yが「旅へ出てから、我孫子は尚淋しくなつた」という箇所からは、友人が旅に出る以前は交流があり、「自分」の淋しさが紛らわされていたことがうかがえる。Yが旅に出た後「丁度其頃最も旧いそして最も親しい友のM」が登場する。これは「自分」の沈んだ気持ちにも良い影響を与える。

画家のSKが其少し前から家族を連れて信州の上林温泉に行つて居たので自分達も其所へ行く事にした。八月廿日朝我孫子を出て妻は初めて赤児の墓参りをした。それから自分は友達の家へ行つた。妻だけ麻布の家へ行つた。（八）

以上の引用は、長女に死なれた後、久しぶりにMと出会った場面の直後の部分である。「自分は友達の家へ行つた。妻だけ麻布の家へ行つた」という箇所からは実家よりも友人のほうが大事になっている様子がうかがえる。

上述のように長女の死後、「自分」は麻布の家族よりも友人達と親しく交際し、家族に「不愉快」を感じているのとは対照的に友人達に「愉快」を感じている。一・二（2）でも見たように、父との日頃の付き合いをなくしたことに比して、友人との親密さが増していることが際立つ。友人達との付き合いは彼の心境を積極的に変化させ、長女の死による彼の生活上の「淋し」さを紛らわせる。また妻が次女を懐妊した後の「自分」の心境に働きかけている。

このような友人達との関わりを除外して作品を読むのなら、「自分」が調和的になるまでの出来事は理解できず、ただ妻が次女を懐妊したことだけで「自分」が調和的になったと理解されてしまうかも知れない。友人との関わりは、「自分」の調和的な考えを生む契機の一つとして見逃すことは出来ないであろう。

二・二　『或る親子』との関わり

二・一では、「自分」が調和的になって行く過程に関わる周囲の者について考えた。主に「自分」を調和的な気分に導く契機の一つとして友人との関わりについて見たが、その過程ではもう一つの重要な要素として「郵便局員」の文章を基にした作品『或る親子』がある。それは『和解』の第九章である。この時期に『或る親子』について言及されていることには何か重要な意味があるのか。以下に考えてみたい。

その時期に、「自分」は「創作に筆をとる事はよさうと決心し」ている。が、「或る新聞から十枚位の日記か、感想を送つて呉と云はれた。自分は「或る親子」と云ふ題をつけて僅か二枚半の文章（中略）を添へて送つた。それは自分の書いたものではなく、或る市で知り合ひになつた其所の郵便局員の書いた二百枚近い長い物から勝手に自分で抜いて文章だけ少し直したものだつた」（九）。ここで郵便局員の書いた「二枚半の文章」をなぜ「或る親子」と題したかという疑問が浮かんでくる。作中では、「自分は父と自分との親子に対してこれも亦或る親子のつもりで「或る親子」と云ふ題をつけたのだが、それはそれだけでは、結婚の事で前後四度父と不和を起こした事を知つてゐる自分に近い少数の人だけにしか解らぬ事とは知つてゐた」（九）と「或る親子」と題する理由を明確に述べている[13]。『或る親子』の背景には『和解』の親子、つまり「自分」と父との関係があるというのは間違いあるまい。また志賀直哉は、同名の作品を大正六年に発表[16]しており、この志賀直哉『或る親子』の冒頭には「（尾の道で知れ合ひになったFの書いた物の一節）」という文章が付

けられている。このことは先の引用に見られる「或る市で知り合ひになつた」と符合している。『和解』に描かれている『或る親子』をよりよく理解するために、大正六年に発表された『或る親子』を具体的に見てみよう。

「お母さん忙しいな？」／「え、もう済んだよ」／「さう、少し聴いて貰ひたい事があるんぢゃが……」私は又恐る〳〵、立上がつた父の顔を見上げて「お父さんにも……」と云つた。／父は黙つて元の所へ腰を下ろした。そして、「オイ、一寸来い」と母を呼んだ。母は漏れ手を前掛で拭きながら出て来た。／「実は俺からこんな事を云ふのは何かをかしいか知れんけえど、俺も思うて居る事を何時までもあんたらに黙つて居る事も出来んからお二人に聴いて貰はうと思ふ。あんまり鉄面皮に聞こえるかも知れんけえど、悪う思うてつかあさんな」（中略）／「何かい、誰か貰うて欲しいと云ふんかい」と眼を瞑つた儘言葉を挟んだ。／「ええ、さうです。Yさんを貰ひたう思ひます」

以上のように主人公は自分で決めた結婚相手を両親に許してもらおうと話を切り出している。この箇所は『和解』の主人公が、「結婚が父との不和の最近の原因」（三）だと感じていることを思い出させる。しかし、『和解』の主人公の結婚が父子間の溝を決定的なものとする一因になるのと比して、『或る親子』の場合は、「あれなら俺も決して悪い事はあるまいと思ふ」（『或る親子』）というように父との対立どころか合意の方向へ進む。

以上の如く両作品には結婚という同じ出来事が扱われていても結果には大きな相違がある。この相違が生じるのはやはり両作品の主人公に父との接し方の違いがあるためであろう。『或る親子』の主人公は『和解』の主人公と違って父の許可を受けて自分がやりたいようにする。『和解』の場合は主人公が父にあまり関わりを持とうとしない。関谷一郎氏が「両者が直接対峙することが少なく、双方が伝聞や手紙を通して相手の意向を知らされるということが、不和への傾斜を強めている」[17]と指摘したように、両者の接触の少なさが父子間の溝を決定的なものとする。『或る親子』の場合は主人公と父との間に交流があり、穏やかに自分の事情を述べ話し合う。その結果父との対立が起こらない。このように、父との交流の有無が重要な点として指摘できるのではないだろうか。

父に接して穏やかに自分の事情を話し合うことで『或る親子』の主人公は父と対立せず、結婚の許しを得ることが出来る。他方『和解』においては、「一昨年の春」父が「自分」の家を訪問した時「自分」が父と会うのを拒絶し、後に、その時会っていたら「本当の和解がその時に来」ていたかも知れないと後悔する（第二章）。このことを考え合わせれば、『或る親子』の主人公がその父に会って話をする場面が『和解』

の第九章に置かれていることが重要な意味を持ってくる。『或る親子』の主人公が「交換手」との「結婚の許しを乞」うために直接両親に話すのに対して、『和解』の「自分」は祖母を自由に訪問できるように父の家へ出入りする許可を得ようと父に直接話すことにする。『或る親子』の主人公は父に会って「今迄両親に黙つて居た事は悪かつた事、然し今は未だ年も若いし、給料も少ないから未来を約束するだけでいいんだと云」う。『和解』の「自分」は「これまでは、それは仕方なかつたんです。それはお父さんには随分お気の毒な事をして居たと思ひます。在る事では私は悪い事をしたとも思ひます」(十三) といって父に詫びる。ここは、両者の話し方に類似が見られる。だが、ただ単に話し方が似ているからといって「自分」についての描き方が『或る親子』から影響を受けたとはいえず、重要なのは面と向かうことがあるかどうかであろう。『和解』の「自分」が父とあまり接触しないことが父子間の溝を決定的なものとする一因となるが、『或る親子』の主人公は父と直接話し合って自分の希望する結婚に父の許しを得ることが出来る。

他者の書きものからわざわざ結婚にまつわる場面を二枚半の『或る親子』に仕立てたのは、『和解』の父子関係にも『或る親子』に描かれたような親子関係があり得ると希望を持ったことを示すものだと思われる。このように、『或る親子』も「自分」の調和的な考えを生む契機となったといえよう。

本章の二・一と二・二に見たように、他者や他者の文章は「自分」に変化をもたらし、この変化がついには「自分」を父との和解に至らせることになる。調和から和解までの状況を段階的に追うと、父子の和解までの過程は「自分」の調和的な「気分」から始まる。いうまでもなく、調和的になったのは突然ではなく、その前の段階で「自分」に働きかけてきた様々な要素があったからこそである。妻が次女を懐妊した後「自分」が調和的になったという要素だけに注目すると、「自分」が調和的になるまでのその他いろいろな出来事を過小評価することになってしまうのではなかろうか。以上に見てきたように、論者はそれらを見落とすことなく、友人との親しい交流や『或る親子』が「自分」を調和へと導いた契機であるとして注目した。

おわりに

本稿では『和解』における父子の確執の状況に目を配りながら作品を分析し、父子の不和の原因を探ろうとした。さらに、父子の和解に尽力するものとして周囲の者に注目し、和解に至る過程を追った。論考の対象を、父との確執の場面に見られる「自分」の態度と、家族のほかに友人との関わりに分けて展開し、さらに、『或る親子』に着目した。

父子間に起きた問題として十一年前に二人の間に起こった

そもそもの不和、「自分」の結婚、そして長女の死や埋葬の場面を見て来た。本稿一で論じた父子の不和の問題では両者の頑固さ、自己主張の強さが要因となっており、両者共に自分の考えを相手に押し付ける態度が見られる。また一方、不和を作品化しようという「自分」の創作活動は失敗に終わる。ここにもやはり「自分」の自己主張が関わっている。「自分」が調和的になったということが意識されて来るのは妻が次女を懐妊した後になるが、本稿二で見たように、友人との頻繁な交流や、ある「郵便局員」の文章を基にした『或る親子』が「自分」に調和的な考えを生む契機となっていることを明らかにした。

父子の不和には自己中心な考え方による自我の主張が見られるのに対し、和解へと向かう段階においては「自分」の自己を離れて他者へと視野を広げる様が見られる。それが父との調和へと自己を導いたと考える。

注

(1)『和解』について作者は次のように述べる。「「和解」は作中にも書いたやうに、其時約束の仕事をしてゐる最中だつたが、父との和解が気持ちよくでき、其喜びと冗奮で、和解の方を材料にして一ッ気に書いて了つた。毎日十枚平均で半月間に書き上げた。(中略)十枚平均十五日といふのは私にとつては後にも前にもないレコードである。(中略)そして書き上げた時、武者に見せたら、讃めてくれた。私は自分は読まずに、〆切日でもあつたし、其儘雑誌社へ送つた。かういふ事も私では例外な事だつた」(『続創作余談』『志賀直哉全集』第六巻 岩波書店 一九九九年)。この時期の出来事について日記の記述を確認すると、大正二～十年の出来事は記載がなく、『和解』が発表された時期(大正六年十月)や直哉の実生活における父子の和解(同年八月三十日)の実際がどのようなものであったかは詳らかでない(『志賀直哉全集』第十二巻・日記(岩波書店 一九九九年)には明治四三～大正二年の記述があり、十三巻・日記(岩波書店 二〇〇〇年)には大正十一年～昭和六年までの日記が掲載されている)。

(2)『志賀直哉全集』第二十二巻

(3)作中では、父とのそもそもの不和は十一年前にあったとされている。作者の実生活における父との最初の対立は十八歳の折、足尾銅山の鉱毒問題で世論が沸騰した時、直哉が鉱毒地視察を計画して父に強く反対された事件であった。(『日本近代文学名作事典』 日本近代文学館編 日本近代文学館 ほるぷ出版 一九八二年。志賀直哉年譜『志賀直哉全集』第二十二巻 岩波書店 二〇〇一年)また直哉は二十四歳の時、家の女中と深い仲となり、結婚を希望したが父の反対にあう。これは「さらに対立を激しくしていたところへの新たなしこり(『日本近代文学名作事典』)」になったという本文の記述に沿う出来事といえよう。やがて、直哉は、「大正三年、武者小路実篤の従妹勘解

由小路康と結婚した。父の認めない結婚で、父との不和を深くした（『日本近代文学名作事典』）」こうした作者自身の現実は、『和解』に反映されている。

（4）ここでは「自分」以外の者（家族、友人や郵便局員等）を指す。

（5）広藤玲子「志賀直哉論Ⅲ――「和解」と「ある男、其姉の死」――」（「広島女子大学文学部紀要」第十二号 昭和五十二年三月 広島女子大学）

（6）関谷一郎「「和解」私読」（「文学」 岩波書店 昭和六十二年五月）

（7）池内輝雄『志賀直哉の領域』（有精堂 平成二年）

（8）志賀直哉の実生活においては父との「和解」が実現された後にもまだ「不和」を材料として『或男、その姉の死』（大正九年）を執筆したという事実から、志賀直哉には不和の実質的な内容はまだ死滅していなかったといえるのではないだろうか。

（9）作品世界で大正六年八月頃になる。

（10）「妻との結婚が父との不和の最近の原因になってゐた」（三）という記述がある。

（11）父子間の和解が実現した直後の父の発言「あした我孫子へ行つて見よう」（十三）を見ると、父が「自分」との関係が良くなったときに最初に取る行動は、「自分」の家を訪ねることである。ここからうかがえるように、父が「自分」の家を訪問しないのは確かに「自分」つまり息子との関係が良くないためであった。父が一番上の妹と一緒に「自分」の家を訪ねたのはやはり息子との関係を「和らげ」ようとしたからであるといえる。

（12）長女の埋葬は土葬だった。（参考：『和解』七章、『母の死と新しい母』四章）

（13）『続創作余談』（全集六巻）には『和解』執筆に関して「当時武者が我孫子の隣村の根戸といふ所に住んでゐて、毎日来て、夕方まで話していつた。そして書き上げた時、武者に見せたら、讃めてくれた。」（傍点論者による、以下も同様）という志賀直哉の言及があり、それを『和解』の「Mが暮れ近くから隣村に住むやうになつて」と比べて考えると、友人Mは武者（武者小路実篤）に他ならない。志賀直哉における武者の存在は、彼が妻の従兄（『日本近代文学名作事典』 一九八二年）であったことや自分の執筆に彼の力を借りる（参考：『続創作余談』）ことがあった点が他の友人たちと異なる。

（14）家族としては、妻・赤児や父はもちろん、母（義母と実母）や祖母・祖父、妹達まで様々な人物が登場する。が、中でも義母と祖母は父子関係に多く関わっている。

（15）志賀直哉の日記（大正二年六月六日、七日、十八日、二十三日、二十五日）にもあるように、父が自身で息子の結婚を決めるという強い意志のせいで自分が決める結婚の話は何回もつぶされていた。さらに、直哉が実際に結婚した際に父の反対に

あったことが、作者自身の心を占めていることがうかがえる。

(16)『読売新聞』大正六年八月五日朝刊　七面

(17)　関谷一郎「「和解」私読」

【付記】志賀直哉作品の引用は『志賀直哉全集』（岩波書店　一九九八～二〇〇二年）に拠る。傍線は総て論者の付したものである。改行部分は／で示した。また、旧字は適宜新字に改め、ルビは省略した。

（モハッマド・モインウッディン／本学大学院博士後期課程）